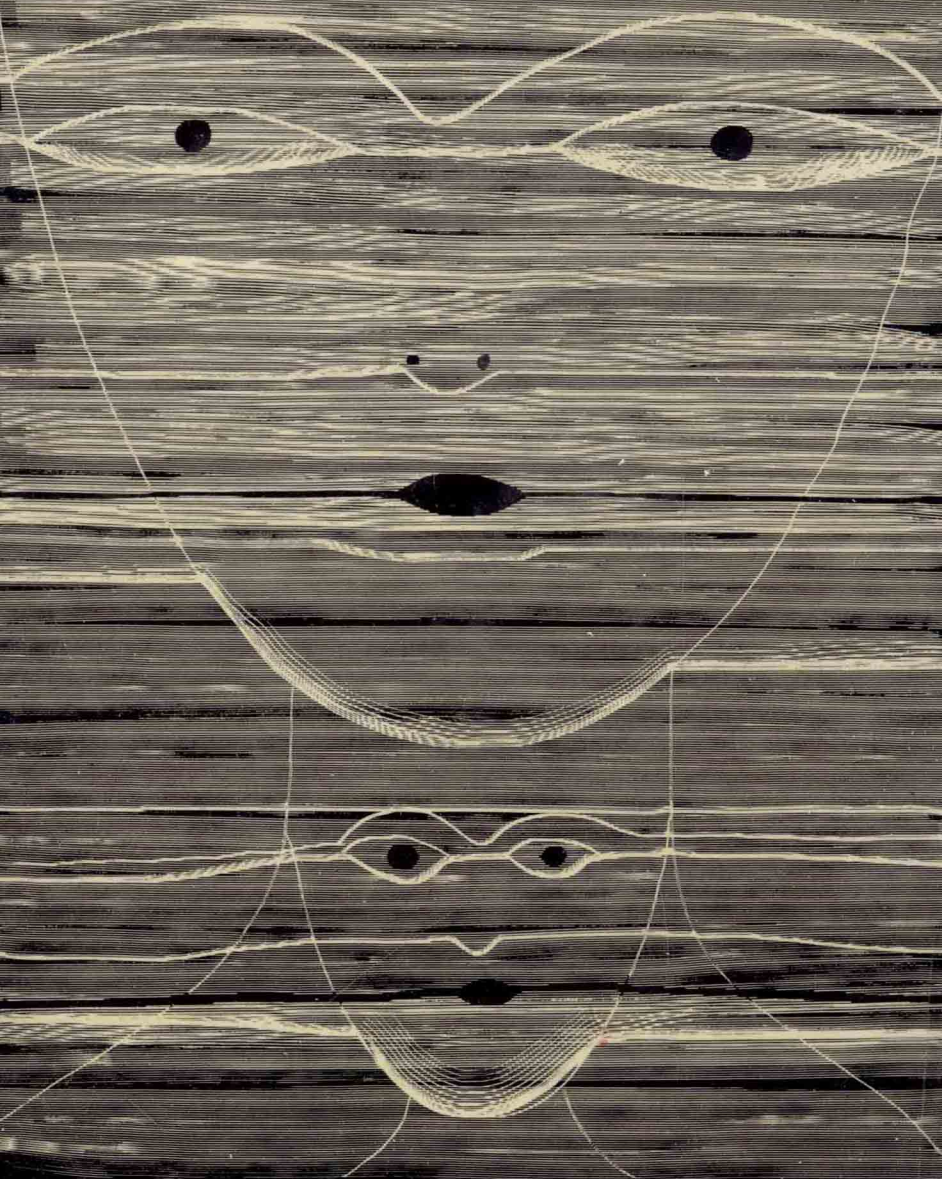


光の領分

津島佑子



光の領分 ■ 津島佑子



講談社

光の領分

昭和五十四年九月三日 第一刷発行

著 者 津島佑子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二 郵便番号 一二二

電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表) 振替東京八―三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 九八〇円



落丁本・乱丁本はおとりかえします。

© Yuko Tsushima 1979, Printed in Japan

目次

光の領分

7

水辺

25

木の日曜日

47

鳥の夢

67

声

87

呪文

105

光素

焰

地表

体

赤い光

砂丘

213

195

177

157

141

121

装幀・司修

短篇連作

光の領分

光の領分

四方に窓のある部屋だった。

四階建ての古いビルの最上階で、私は幼い娘と二人で一年間過ごした。一世帯でひとつの階と、屋上を占有していた。一階はカメラ屋、二階と三階は半分ずつに分かれて、貸事務所となっていた。純金製の紋章を、注文に応じて、盾や額絵に仕立てている夫婦二人きりの会社、会計事務所、そして編物教室の分室が、それぞれの部屋を使っていたが、三階の表通りに面した部屋だけは、私が住んでいる間、遂に一度もふさがらなかった。夜、娘が寝てしまってから私は時々、その部屋に忍びこみ、窓を細めに開けて、四階からの眺めとは様子の違う眺めを楽しんだり、なにもない部屋のなかを歩きまわったりした。誰も知らない、秘密の部屋にいるような気分だった。

私とそのビルに移るまでは、四階はビルの持ち主の住居だったそうで、なるほど、そう言えば、四階の部屋からしか屋上に上がれなかったのも、その屋上に広々とした風呂場が作られているのはよかったが、そこにある給水塔とテレビ・アンテナの管理が、なんとなく、私に委された形になってしまったのも、また、事務所の人がみんな帰ったあと、夜遅く、一階まで階段を下りて行って、階段口のシャッターを下ろさなければならなかったのも、持ち主にとっては当然のこ

とだった。

そのビルが丸ごと売りに出され、藤野という、土地では有名な女性の実業家が買い取り、第三フジノビルと名付けられてからはじめての住人が、私だった。ビルを専門に扱っていた新しい持ち主にとってもはじめての住居用の部屋だったらしくて、なにしろ老朽化したビルだし、普通のアパートのような造りにはなっていないし、果たして借り手がつくだろうか、とおそろおそろ安い家賃をつけてみて、様子を窺っていたらしい。偶然とは言え、私にとってはこの上もない好運だった。当時、まだ私の夫だった男の姓とビルの名が同じだったのも、偶然だった。おかげで、始終、四階の私は大家と間違えられていた。

狭く、急な階段を真直ぐ登りつめると、アルミ製のドアがあり、反対側には非常階段に出る鉄の扉があった。踊り場が狭いため、住居のドアを開ける時は、階段を一段下がるか、非常階段の踏み板に体を退けなければならなかった。非常階段と言っても、それは地面と直角の鉄の梯子だった。いざという時には、娘を抱きビルの階段を思いきって転げ落ちて行った方が、まだしも命は助かりそうだった。

けれども、ドアを開ければ、昼間のどの時間も部屋のなかは光に充たされていた。ドアから直接続くダイニング・キッチンに赤い床材が敷き詰められていたので、部屋の明かるさの印象は、一層、強かった。階段の暗がり慣れていた眼を、細めずにはいられなかった。

——わあ、あったかいねえ。きれいだねえ。

はじめて、その部屋の光を浴びた時、もうすぐ三歳になろうとしていた娘は、こう叫んだ。

——ほんとに暖かい。お日さまって、いいね。

私が言うと、娘はダイニング・キッチンを走りまわりながら、誇らしげに言った。

——そうだよ。ママはしらなかったの？

光の量で、娘を環境の変化から守ることができた、と私は自分で自分の頭を撫でてやりたい心地になっていた。

朝の光を受ける窓は、ドアの横手にある二畳足らずの納戸のような小部屋にあった。私はそこを寝室に決めた。東側のその窓から覗くと、まわりにたてこんでいる家の物干し場や、第三フジノビルより、もっと小さなビルの屋上が見えた。国電の駅前の商店街なので、庭を持つ家は一軒もなく、物干し場や屋上に、ありったけの鉢を置き並べ、デッキ・チェアなども置き、上から眺めるといかにも居心地が良さそうで、そこに浴衣姿の老人を見かけることも多かった。

南に向いた窓は、この二畳の部屋、ダイニング・キッチン、六畳の部屋、と一列に並んでいるどの部屋にもあった。一軒の古い平屋の屋根を隔てて、バーや焼鳥屋の並ぶ路地が見下ろせた。細い路地なのに、車の往来が激しく、いつも警笛の音が鳴り響いていた。

西側、つまり細長い部屋の突き当たりが、バス通りに面した大きな窓で、西陽と騒音が容赦なくそこから注ぎこんできた。真下に、歩道を行き交う人の黒い頭が見え、朝は駅の方へ、夕方は逆の方向へ流れていった。反対側の歩道には、花屋の前のバス停留所に佇んでいる人の姿も見ら

れた。バスやトラックが通るたびに、四階の部屋は揺れ、食器棚の食器が鳴った。三叉路、南側の路地も勘定に入れば、十字路に、私が娘と共に移ったビルは面していた。しかし、一日に何回か、赤信号と車の流れの組み合わせが、十秒ほどの静寂を作ることがあった。その静寂に気がつくのと、信号が変わって、待ち兼ねていた車がいっせいにエンジンをふかしはじめるのと、いつも、ほとんど同時だった。

この西側の窓の左手に、大名の屋敷跡という広大な庭園の森が見えた。ほんの一角しか見えなかったのだが、私にとっては大事な緑だった。その緑が、窓からの眺めの中心だった。

——あれ？ あれはブローニュの森。

私は家を訪ねてくる人に問われるたびに、こんな答え方をしていた。パリの郊外にあるという、名前だけは、ブレイメンとかフランダースのように、童話の題名同様に憶えこんでいた森なのだが、その名をふざけて口ずさんでみるだけで、結構、気持が弾むのだった。

ダイニング・キッチンの北側の壁に、物入れと便所と、屋上に通じる階段が並んでいた。便所にも窓はあり、そこからは駅と電車が見えた。娘の好きな小窓だった。

——バスもデンシャもみえるんだぞ。おうちがゆれるんだぞ。

と娘は自分の通っている保育園で、保母や友だちに自慢しはじめた。が、娘は引越してすぐ、熱を出し、一週間ほど寝こんでしまった。私は近くの街に一人で暮らしている母のもとへ、娘を預け、勤め先のライブラリーに通った。放送局の分室で、放送に関する資料、使用済みのテ

ーブを整理したり、カードで貸し出ししたりする仕事だった。仕事が終わってから、母の家を訪ね、九時過ぎまで娘のそばで過ごしてから、一人でビルに戻った。夫に連絡すれば、手を貸してくれるのに違いなかったが、母に迷惑をかけてでも、私は夫を頼りたくなかった。いや、夫を私の新しい生活に一步たりとも、踏みこませたくなかった。自分で呆れずにいられないほど、私は夫が再び自分に近づくことに怯えていた。夫への自分の狎れがこわかった。

夫は幾度も、私に実家に戻ることを勧めてくれた。お前のお母さんも、一人きりじゃ、心細いに決っているし、お前だって、一人で子どもを見ていくのは大変じゃないか。俺も、それだったら、安心して、お前と別れられるよ。

夫はすでに、私鉄の沿線に、自分の引越し先を決めていた。その部屋が空く一ヵ月後に、引越しをする予定でいた。

私は自分の行先をどこにすればよいのか、考えられずにいた。夫の決意が、まだ充分、呑みこめずにいた。明日になれば、あれは冗談だった、と笑う声が聞けるのではないか。それならば、なぜ、自分の引越し先の心配をしなければならないのだろう。

私は、母の家には戻りたくない、と言った。それだけはいやよ。あなたがいないことを、そんなことでごまかしたくないわ。

すると、夫は私の住むアパートと一緒に探してやろう、と言ってくれた。お前一人じゃ、すぐにだまされるよ。変なアパートに行かれたら、俺も気になって、おちおち眠れなくなる。いいか

ら、俺にまかせておけ。

一月の末頃だった。快晴の日が続いていた。夫と共に、不動産屋に通いはじめた。私は黙って、夫のあとに従って行くだけでよかった。昼休みに、勤め先の近くの軽食の店で夫と落ち合い、その付近を歩きまわった。

夫が不動産屋に告げていた条件は、二DKで、日当たりが良く、風呂も付いているところ、それで家賃は三、四万円程度、というものだった。そんな部屋なら、今は、六、七万はしますよ、と最初の日に入った不動産屋に笑われた。

へ実は、この人と子どもが住むんですよ。ぼくなら、どんなところでも構わないんですがね、できるだけ、いい部屋に住ませたくて。……どこありませんか

夫は私を振り返りながら、言った。

次の日も、同じ会話が別の不動産屋で繰り返された。私はたまりかねて、夫に囁きかけた。

へお風呂なんか、なくなっているのよ。それに、一部屋だけでもかまわない

それから、不動産屋に直接、語りかけた。

へね、一DKで三、四万という部屋なら、いくらかはありますよね

へええ、それなら……

不動産屋が私に答えながら、台帳を開きかけると、夫が子どもを叱るように、私に言った。

へまた、君はすぐに投げだしてしまおう。だめだよ、そんなことじゃ。今は払うのが無理なような